

レポ ー ト

R. H. トーニーの成人教育における軌跡と思想

NPO 法人全日本大学開放推進機構研究員 香川 重遠

1. はじめに

トーニー (Richard Henry Tawney, 1880—1962) は稀有なほどに広範にわたる業績をもち、経済歴史家、ジャーナリスト、社会主義思想家、労働運動者、成人教育の指導者として著名であり、政治面においては労働党の政策立案のブレーンも務めた。トーニーの主たる経歴を見てみると、ラグビー校を経て、オックスフォード大学ベイリオル・カレッジ卒業後、トインビー・ホールに赴任し、その後、短期間のグラスゴー大学講師やジャーナリストを経て、その生涯のほとんどをイギリス最大の成人教育組織である WEA (Workers' Educational Association) での活動に尽力している¹。

トーニーは多方面にわたって学術的に高い評価を得ている人物であるが、経歴上でみるならばトーニーの生涯にとっては、WEA での成人教育の普及が主たる活動分野であった。宮坂は、トーニーを「W.E.A の歴史における、もっとも傑出した理論的・実践的指導者」と位置づけると同時に、「今世紀〔20 世紀〕英国の成人教育史における巨星——おそらく最大の——であった」と、その成人教育における貢献を絶賛している (宮坂 1996b : 165)。

トーニーの業績は膨大であり、経済学や歴史学、または社会主義思想などの観点からは、わが国においてもこれまでに数多くの研究がなされてきたが、それらに比して、教育学の観点からの研究は少なく、とりわけ成人教育の分野において宮坂は「成人教育研究者による包括的研究はまだ出ていない」と指摘している (宮坂 1996b : 166)。本稿では、トーニーの WEA での長期にわたる活動・実践と社会主義思想に裏付けられた成人教育思想の特色

¹ トーニーの人物・略歴・業績についてはテリルによる伝記が詳しく、本稿でも随所で参照しているが、とくに巻末にまとめられた 572 点にもものぼるトーニーの著作リストは、その業績の膨大さを物語っている (Terrill 1973 : 287-313)。宮坂は、トーニーの業績について、「ただひとりの人物がこれほど多面的な活動をおこない、そのひとつひとつですぐれた成果をあげたことも珍しい」と指摘している (宮坂 1996b : 165)。

を明らかにすることを目的とする²。こうした研究は、成人教育思想の源流を拓けることによって、今日における成人教育を根源的に考えるうえでの示唆をもたらすものとする。

2. トーニーの成人教育における軌跡

(1) トインビー・ホール時代

トーニーは、ベイリオル・カレッジ卒業後、1903年から1906年までの間にわたって、イギリス初の大学拡張としてのセツルメントであるトインビー・ホールにおいて児童田園休暇基金の事務局長を務めた³。トーニーと福祉国家の建築者ベヴァリッジはベイリオル・カレッジ時代からの学友であったが、彼らがトインビー・ホールに赴任するきっかけとなったのは、理想主義哲学者としてグリーンに次ぐ位置にあったベイリオル・カレッジ学寮長ケアードの影響によるものであった (Dennis and Halsey 1988 : 153)。ベヴァリッジの自伝によると、ケアードは学生時代の彼らに対して以下のように説いていたという。

君たちが大学にいる間、君たちの第1の義務は政治やフィランソロピーにあるのではなく、自己の修養にある。しかし、この義務をやり遂げ、オックスフォードで学ぶことができるすべてを学んだ後、君たちの誰かにぜひやってもらいたいことがある。それは、イギリスには大きな富が存在しながらも、なぜこのように貧困が存在するのか、また、これらの貧困をどのようにして取り除くかを究明することである⁴ (Beveridge 1953 : 9)。

テリルによると、トーニーがトインビー・ホールで働き始めたころは、ケアードの言葉の意味がわからなかったが、3年後には実践を通じて自ずと理解できたという (Terrill

² テリルが「トーニーは教育の理論家ではなかった」と述べているように (Terrill 1973 : 182)、本稿でも研究の対象をトーニーの成人教育「論」ではなく成人教育「思想」として取り扱う。

³ トーニーは、当初、ベイリオル・カレッジ卒業後はCOS (Charity Organisation Society) に入るつもりだった (Winter and Joslin 1972 : 43)。

⁴ ベヴァリッジは『ベヴァリッジ報告』 (*Beveridge Report*) を発表した第二次大戦後のイギリス福祉国家の建築者として有名であるが (Beveridge =1962)、トーニーもまた福祉国家の学術的解釈の発展に大きな影響を与えた人物であり、とくに、社会政策研究の学祖ティトマスとの学術的なつながりは強かった。たとえば、ライスマンは、「トーニーとティトマスの関係性を通じて、イギリスの共同文化という伝統が、共有された社会的価値に強く根差した社会福祉への要求へと変わった」と評している (Reisman 1982 : 74-5)。また、ピンカーは、トーニーに関して、「彼は『ラタン・タタ財団』の創設に中心的役割を果たし、LSEにおける社会福祉運営論の基礎を固めた」と述べている (Pinker 1994 : 322)。

1973 : 31)。ライトは、トーニーにとってトインビー・ホールの実践が重要であったことは明らかであるとし、「そこには貧困と社会的困窮だけでなく、イースト・エンドの労働者階級の連帯や『人間中心主義』(‘humanity’) (当時のトーニーの言葉) を経験する、直接的な接触があった」と指摘している (Wright 1987 : 4)。

トーニーのトインビー・ホールにおけるもうひとつの収穫は、キリスト教社会主義者であったバーネット館長の下に活動したことによって、キリスト教社会主義の信念を確固としたことにある (Meacham 1987 : chap. 7)。これを裏付けるように、ライトは、「1914年までに、社会主義者としてのトーニーの教育は事実上完成されていた」と指摘している (Wright 1987 : 8)。また、トインビー・ホールで過ごした時期はトーニーの人生にとっての大きな転機でもあった。トーニーは、1905年に、バーネットを介して WEA の創設者マンスブリッジと出会い、すぐに WEA の活動に加わり執行部の一員となった。その後、1906年には労働党とフェビアン協会にも加入しているが、なによりも WEA への加入はトーニーのその後の人生にとって一大転換期をなすものであった。

一方で、ミーチャムはトーニーのトインビー・ホール時代に関して、「トーニーはこの数年間で教育者として彼の感覚で最高の義務を果たせなかったことは間違いない」といい (Meacham 1987 : 161)、「トーニーはトインビー・ホールで『実践によって』労働者階級と関わることを望んでいたが、それはかなわなかった」と述べている (Meacham 1987 : 171)。これらはトーニーが、トインビー・ホールでは、本格的にチューターとして講座をもつことができなかったことへの幻滅をあらわしている。

そうした理由から、1906年には、トーニーはトインビー・ホールを去り、以降は主として WEA での活動に専念した。トーニーにとってトインビー・ホール時代とは、成人教育との出会いと社会主義思想との確立時であり、その後の成人教育思想の形成への重要な起点であった。

(2) WEA 時代

マンスブリッジは1903年に WEA の母体を立ち上げたが、その後の WEA の発展の最大の要因は、ロッチデイルで試みた一クラス 30 名程度の受講生に対して3年制で最終試験を実施し、修了証も与えるというチュートリアル・クラスの導入にあった。WEA でのトーニーの最初の貢献は、そのチュートリアル・クラスの運営を先駆けて実践したことにある。宮坂は、「チューターとして、当時 Glasgow 大学で経済学を教えていた Tawney に白羽の矢が立てられた。Rochdale というのは Manchester 大学に近いのだが、わざわざ遠い Glasgow から Tawney を tutor として招こうというのは、Tawney の力量に対する信頼が深かったことを意味する。なにしろ初めての実践であり、成否はチューターの能力にかかる

こと大であったのである」と述べている (宮坂 1996b : 101)。

トーニーは、オックスフォード大学でチュートリアル・クラスのチューターを務め、ロッチデイルやロントンなど5か所を巡り歩き、労働者を約40名のクラスとして経済学や文学などの講義を担当した。トーニーは当時に関して、「もし私が私自身の教育のもっともすぐれた部分をどこで受けたのかと問われるなら、それは学校や大学ではなく、チュートリアル・クラスの時の若気にはやった青年教師として、毎週毎週、このクラスの学生からやさしくも厳しい言葉で、うぬぼれがくじかれていったときだ、と答えたい」と述べている⁵ (Tawney 1964a : 82)。矢口は、WEAの黎明期に関するマンスブリッジとトーニーの役割分担を、「マンスブリッジが組織化の面で中心的な役割を果たしたとすれば、実質的な教育はトーニーの思想によって支えられたといえよう」と評している (矢口 1998 : 148)。

その後、WEAは急速に拡大し、1908年の時点で、1,000を超す労働者や教育団体と連合し、その中には420の労働組合やその支部、150の協同組合委員会、120の成人学校やクラス、8の大学拡張当局、3のユニバーシティ・カレッジ、350の諸協会が含まれるまでに発展した (WEA 1909 : par.10)。WEAが発展する一方で、19世紀後半以降からはじまった、オックスフォード大学の労働者階級への大学拡張運動も進展を見せていた。こうした中、1907年8月にはWEAの働きかけにより、オックスフォード大学を会場としてオックスフォード大学と労働者階級の教育に関する会議が開催され、1908年には「オックスフォード大学と労働者階級の教育」報告書としてまとめられた。同報告書によって、チュートリアル・クラスの運営基本原理は確立された (WEA 1909)。同報告書を翻訳した安原は「記者あとがき」において、「同報告書の大部分はA. E. マージンとR. H. トーニーによって執筆されたという」と記している (安原 2006 : 167)。このようにWEAの拡大を促進した、チュートリアル・クラスの発展や基本原理の確立は、WEAでのトーニーの初期活動にそのほとんどを負っていた。

こうした貢献から、1928年にトーニーはWEAの会長に選出された。テリルは1930年代のWEAを「トーニーの時代」と位置づけ、「彼はイングランドの成人教育の先導者とな

⁵ トーニーは1912年の初著『16世紀の農業問題』(*The Agrarian Problem in the 16th Century*)の見開きにおいて、「WEA会長テンプルと事務局長マンスブリッジとにささげる」と記しており、序文においても、「最後に私は言葉にはいいあらわせないほど多くのものを2つに負っている」といい、「第1は私の妻に対して」であり、そして、「第2はオックスフォード大学によっておこなわれたチュートリアル・クラスの人びとに対してであって、私は過去の4年間、これらの人びとと共に働く (fellow-woker) という特権をあたえられてきた。織布工や陶工や紡夫や機械工の愛情ある批判は、政治学や経済学の諸問題について、書物からは簡単には得ることのできない多くのことを私に教えてくれた」と記している (Tawney 1912 : xxv)。

った」といい、その活動ぶりを具体的に、「WEA の会長に選出された時期から 16 年後のバルター法までの間で、トーニーは『ガーディアン』(*Guardian*) に教育に関する 90 本あまりの論文を載せた」と述べている (Terrill 1973 : 84)。トーニーは 1945 年に WEA の会長を退いたが、テリルはその働きぶりに関して、「WEA の過去のどの会長よりも、トーニーはもっとも精勤な会長であった」と評している (Terrill 1973 : 85)。

トーニーは、1947 年に WEA から身を引いた後に、WEA の拡大の軌跡をなぞるかのようになり、「イングランドでは、主な教育運動はすべて社会運動でもあった。それらは、人間らしい生活、およびそれをもっとよくしていけるような社会についての、ある特定の考え方が、——精神と人格の陶冶という——ひとつの分野で表現されたものであった」と述べている (Tawney 1964a : 84)。宮坂は、トーニーとマンスブリッジとの WEA での「約半世紀にわたる組織の接合 (institutional connection)」について (Terrill 1973 : 37)、「両者ともに成人教育は『民主主義の一翼』とみなしつつ、民主主義と社会主義の結合を求め、あくまで『労働者階級』解放のための教育に固執したことが、Tawney の個性であり、また W.E.A への最大の貢献であった」と評している (宮坂 1996b : 168)。また、テリルは、「トーニーの WEA へのなによりの貢献は、その教育と労働者運動の高度な水準を維持したことであった。トーニーは WEA のクラスを娯楽的な議論の時間にしようとしなかった。トーニーは教育と労働者の社会的解放の間をつなぎ続けた」と指摘している (Terrill 1973 : 86)。

3. トーニーの成人教育思想

(1) 「平等」と「ヒューマニズム」

トーニーの成人教育思想の根幹にあったのは社会主義思想 (キリスト教社会主義、もしくは倫理的社會主義や民主社會主義ともいわれる) であり、その根底には「平等」と「ヒューマニズム」があった。それゆえに、以下では、主として『平等論』(*Equality*) における「平等」と「ヒューマニズム」に関する主張を見ていきたい⁶。

トーニーの「平等」思想の背景には、当時のイギリスの富裕層と労働者階級とが分裂されているという社会構造にあった。トーニーは、「労働者階級運動が支持しているものは、明らかに、富の獲得を通じた個人的出世の過度な強調に対する強制としての社会正義と連

⁶ トーニーは『平等論』の見開きにおいて、「ウェップ夫妻にささげる」と記している (Tawney 1964b)。ピンカーはその理由を、「多分、それは、彼等が『国民最低限所得』の必要性に関して見解を共有したからであろう」と述べている (Pinker 1994 : 318)。しかし、デニスとホールジーによれば、その後、ウェップ夫妻の福祉問題への過度な統計アプローチや、ソビエトのスターリン体制を称賛した著書を発表したことにより、ウェップ夫妻への共感を失ったという (Dennis and Halsey 1988 : 180)。

帯という理想である」と労働者階級運動を肯定的にとらえ、「それは金銭と権力が人間の目的に役立つものではなく、人間により高い価値を置き、それらにより低い価値を置く社会の可能性を信じることである」と主張している (Tawney 1964b : 40)。

トーニーは、そのような不平等が社会的に蔓延しつつあるときにこそ、共同社会 (community) には、共同文化 (common culture) が必要であると指摘している。トーニーのいう共同文化とは、「かなりの経済的平等など——それは必ずしも金銭的な所得の同水準だけではなく、環境の平等、教育と文明の手段に接近する機会の平等、保障と独立の平等、および通常これらの平等が自ずともたらす社会的考慮の平等を意味する——を必要とする」ものであり (Tawney 1964b : 43)、トーニーはその役割を教育の普及に求めている。

そうしたトーニーの教育による「平等」志向は、中等教育論にも見受けられ、「教育的な観点からいうならば、人間の肉体と知性の発達を促進するためには、正常なすべての子どもたちが初等教育から何らかの形で中等教育へと進むべきなのである」と主張している (Tawney 1964b : 72)。こうした主張の背景には、当時において、中等教育へと進むことのできる子どもは富裕層に限られていたことがある。1922年に、トーニーは労働党の教育諮問委員会のために『すべての者に中等教育を』を執筆・編集していたが (Tawney 1922 = 1971)、トーニーの主張は1926年の「ハドウ委員会報告書」に反映はされたものの、実際には第二次大戦後まで現実化されなかった。

また、トーニーはパブリックスクールの問題点について、「異なった階層の人々を、まるで人種が違うようにつかう教育の組織は、[階級間の] 相互理解を妨げる。わが国の現在のやり方は、まさにそれなのである」と否定的な見解をみせる (Tawney 1964b : 61)。トーニーはそうした教育の弊害と矛盾を、「第1の立場としては、それは、能力について誤導という結果を生む。収入の少ない家庭の子どもは、寄宿生のパブリックスクールが与えているような形式の教育には、恵まれた能力をもった子どもに対し、経費がかかりすぎるために入学を阻止されている」と指摘する (Tawney 1964b : 63)。さらに、トーニーは、「恵まれた能力をもった子どもだけでなく、その両親の財力が決定的な役割を演ずるような、高等教育選択制度の第2の結果も、また同じく深刻である」と教育における「平等」の問題を高等教育にまで広げている (Tawney 1964b : 64)。結局、トーニーは、これらの問題は、「財産に基づく差別という、克服しなければいけない重要なものを、かえって恒久化することになるであろう」と、当時の教育制度のもつ経済的な「不平等」の固定化を助長する傾向を批判している (Tawney 1964b : 67)。

また、トーニーは「ヒューマニズム」の観点からも教育の有する精神と人格を陶冶する力を重視していた。トーニーは、「ヒューマニズム」とは、「生存の機構 (machinery of

existence) ——財産、物質的な富、産業組織、および社会制度のすべての構造と機構——はひとつの目的のための手段とみなされるべきであり、そして、その目的とは個々の人間の完成に向かった成長である、という信条のことである」と定義している⁷ (Tawney 1964b : 85)。

ライトは、「トーニーにとって、社会の道徳的病理の診断と道徳的健康の回復のための処方箋は、つねに中心的な優先事項であった」と述べているが (Wright 1987 : 29)、その処方箋のひとつに、教育の普遍化における「平等」と「ヒューマニズム」の確立と追及があったことは間違いないであろう。

デニスとホールジーは、『イギリスの倫理的社会主義』 (*English Ethical Socialism*) において、倫理的社会主義の代表人物として、モア、コベット、ホブハウス、オーウェル、マーシャル、トーニーの6人をあげているが、その中でもトーニーは倫理的社会主義者の「偉大なる現代の巨匠」として位置づけられている (Dennis and Halsey 1998 : 3)。デニスとホールジーは、トーニーの倫理的社會主義思想の特色として、「なによりもまず、人間的、道徳的、そして宗教的であった」と指摘している (Dennis and Halsey 1988 : 150)。トーニーの社会主義思想は、実際に、その後の労働党の著名な指導者層にも多大な影響を与えた。テリルは、「ゲイツケルやダービンにとって、トーニーは彼らの知るうえでの最高の民主社会主義の主唱者であった」と述べている (Terrill 1973 : 79)。

(2) 成人教育

トーニーの成人教育思想に関しては、主としてトーニーの没後にまとめられた論文集である『急進主義の伝統』 (*The Radical Tradition*) の第2部「教育」にまとめられている。

トーニーは、成人教育における「人文教育」に強いこだわりをもっており、「とくに『人文教育』は、若干の限定された職業グループ——これにいま企業の経営という職業も加えようとされているのだが——に属する人びとにのみふさわしいものであり、それは肉体労働者階級とは何の関係もないものだという、多くの教養人のあいだに流布している、気どりこんだ、厚かましい考え方である」と述べている (Tawney 1964a : 71)。岡田と中村は、トーニーの成人教育における人文教育の強調に関して、「実はここに、彼の成人教育論の基本的主張が存在する。すなわち、彼は、すべての人々に高度の人文 (自由) 教育を提供す

⁷ トーニーは「ヒューマニズム」という用語を「唯物主義のアンチテーゼ」として用いていることを強調している (Tawney 1964a : 85)。トーニーは『急進主義の伝統』の「社会の経済構造」において、マルクス社会主義に対して極めて否定的な見解を示している (Tawney 1964a : chap. 9)。

ることを理想とし、その具体的方策としての『成人教育』を訴えるのである」と指摘している(岡田・中村 1969: 94)。矢口は、「トーニーはアーノルドやラスキンの教養論を引き継ぎつつ、リベラルな教育を人文教育(human education)と同じであると解釈し、大学がその提供者になるべきであると主張した」と述べているが(矢口 1998: 149)、トーニーの強調する「人文教育」は、「教養教育」と同義としてとらえてよいであろう。

トーニーは教育における「平等」を重視し、「[教育における] 選考は、能力のない者が高い地位につくのを防ぐために必要とされる」と論じているが(Tawney 1964a: 73)、その背景には、富裕層にのみ教育の機会が与えられ、労働者階級にも有能な人間がいるにもかかわらず、低い地位に押しとどめられているという当時の教育をめぐる矛盾の構造があった。それゆえに、トーニーは、「われわれが要求しているのは、生涯を通じて『普通の』労働者である人びとにも、できるかぎりの大学教育を、ということなのである」と成人教育の必要性を強調する(Tawney 1964a: 74)。トーニーにとっての成人教育は「平等」な民主主義社会の形成への重要な原動力となるものであった。

トーニーは成人教育の意義について、「教育に終わりはないということは、人類が若いころには覚えておきながら、実際にそれにあたる年ごろになるとどうしてもよいと考えているような、そういうもっともらしい常識のひとつである」と、個人の精神の向上と人格陶冶という「ヒューマニズム」としての成人教育の必要性を主張している(Tawney 1964a: 80)。

トーニーは、成人教育を含めて教育の有する力を以下のように述べている。

教育というものは、他にいろいろな効用はあるとしても、少なくとも部分的には、われわれが自分の孤立した人格の壁を乗り越え、過去の間人もふくめてわれわれの同朋と利益を共有する世界に加わる過程である。文学や芸術、社会の歴史や科学の教義をある程度学ぶことによって、人類の勝利と悲劇を知り、人間の性質がどれくらい高められるか、そしていかに深く押し下げられうるかを認識するところまでいくのであれば、いかなる人もこの世界で十分に平静でいることはできないのである。

.... 成人教育がその名に値するのであれば、その目的は単に信用しうる知識を授与するというだけではない。それはもちろん重要ではあるが、しかしそれ以上に知識を支配し利用する知的な活力を育み、それによって知識が重荷になったり、自慢の種になったりするのではなく、建設的な思想の刺激となり、行動への奨励となるようにすることである(Tawney 1964a: 83-4)。

すなわち、教育とは人間の性質を高めるものであり、それを継続する成人教育とは、新しい思想や行動への奨励となりうるものなのである。こういった新しい思想や行動は個人の精神と人格の陶冶だけでなく、社会に対しては「平等」の追及を可能とするのであった。

こうしてみると、トーニーにとっての成人教育は、トーニーの理想とした「機能社会」(functional society) へという道筋をつけるためのものであったと解釈できよう⁸。トーニーは、初期の著書『獲得社会』(*The Acquisitive Society*) において、「機能社会」について以下のように述べている。

機能とは、社会的目的という理念の具体化と表現する活動として定義することができるだろう。

.... 産業の目的は明白である。それは人間に必要で、有用で、美しいものを供給し、肉体または精神に生命をあたえることである。産業がこのような目的で支配されている限り、無害であり、面白くあり、人間の活動のうちでもっとも重要なものである (Tawney 1921 : 15)。

一方で、1920年代までのイギリス社会を「獲得社会」(acquisitive society) と称し、以下のように批判している。

彼らは社会組織の目的や基準などを問われるならば、[功利主義的な] 最大多数の最大幸福の公式を想起させるような回答を与えるであろう。

.... 幸福とは個人的なものであり、幸福を社会の目的とすることは、社会そのものを各人がある個人的な達成に努力している無数の個々人の野心に溶解してしまうことにほかならない。このような社会のすべての傾向と利益と占有観は富の獲得を促進することであるからこそ、それを「獲得社会」と呼ぶことができる。

.... このような理念の衝動のもとには、人々は宗教的にも、知的にも、芸術的にもならない (Tawney 1921 : 32-3)。

⁸ トーニーの「機能」という概念は、フランスの社会学者デュルケームの機能主義論に影響されたものと推測されている (Durkheim =1989)。ピンカーは、『獲得社会』と『平等論』にはエミール・デュルケームの名前は出てこないが、いずれの書にも彼が書いたのと同じ様な節がある。ティトマスと同様にトーニーも、良い社会とは統合的社会制度と共通の社会目的によって結ばれた道徳的コミュニティである、と考えるデュルケーム的見解を示していた」と述べている (Pinker 1994 : 322)。

功利主義の原則では、少数の幸福は無視されることになる。矢口はトーニーの「獲得社会」に対する強い批判に関して、「物質中心、利益中心の社会を批判し、その弊害がすべての人々を縛るものであることを指摘するトーニーの姿勢は、一貫して彼の教育思想の基礎をなしていた」と指摘している (矢口 1998 : 150)。

トーニーは、「平等」と「ヒューマニズム」の確立のためには、人間が生涯にわたって学び続ける必要があるという考えをもっていたのであり、そこには、すべての者の善き生活を実現する共同社会の構築が必要となるという、トーニーの母校であるベイリオル・カレッジの理想主義哲学の伝統が見受けられる⁹。

4. おわりに

デニスとホールジーは、「トーニーは、パックス・ブリタニカの終焉から、労働党が政治的急進主義の主たる担い手であることを終え、国家体制になるまでを見終えてから、1962年に生涯を終えた」と述べている (Dennis and Halsey 1988 : 149-50)。トーニーの生涯を時系列的にみれば、『獲得社会』 (=1921年) から『平等論』 (=初版は1934年) そしてWEAでの長期にわたる活動 (=1905年から1947年) というように、トーニーは「獲得社会」から「機能社会」へという発展を理想とし、そのために「平等」と「ヒューマニズム」の確立を求め、生涯を通じて成人教育の普及および発展に尽力したといえよう。

わが国の成人教育研究や実践においても、イギリス成人教育は多大な影響を及ぼしてきたが、トーニーの成人教育史における貢献に関する包括的な研究がなかったのは不思議に思われる。トーニーの成人教育思想の特色は、それが有する力を、第1に、個人の内面においては、「ヒューマニズム」としての生涯にわたって学び続けることによる精神と人格の陶冶の力、第2に、社会の構造に対しては、「平等」の追及による理想的な社会、すなわち「機能社会」を実現する力、とみなしていたことの2点にあったと要約されよう。

それを今日のわが国の成人教育に関する考え方の現状に照らし合わせ、この2点のバランスを考えてみるならば、より後者の点に力を入れていく必要と思われる。教育とは人間の成長を促すだけでなく、社会の安定及び変革の力ともなりうるものであり、とりわけ民主主義社会を深化するうえで成人教育の必要性はもっと強調されてしかるべきであろう。トーニーの成人教育における軌跡と思想は、今日のわが国の成人教育においても十分に示唆

⁹ 理想主義哲学とは、オックスフォード大学ベイリオル・カレッジのグリーンを中心に形成された哲学であり、ドイツの観念論とギリシャ哲学とを融合させた、功利主義と対をなした自由主義の改良を志向する哲学であった (Adam =1968 : cap. 2)。

に富む知的遺産であるといえよう。

参考文献

- Adam, U. (1951) *Philosophical Foundation of English Socialism*, Harvard University Press. (=1968、谷田部文吉『イギリス社会主義の哲学的基礎』未来社刊。)
- Beveridge, W. (1942) *Social Insurance and Allied Services*, (*Beveridge Report*), HMSO. (=1962、山田雄三監訳『社会保険および関連サービス——ベヴァリジ報告』至誠堂。)
- . (1953) *Power and Influence*, Hodder and Stoughton Ltd.
- Briggs, A. and A. Macartney (1984) *Toynbee Hall : The First Hundred Years*, Routledge and Kegan Paul.
- Dennis, N. and A. H. Halsey (1988) *English Ethical Socialism : From Thomas More to R. H. Tawney*, Clarendon Press.
- Durkheim, E. (1893) *De la Division Travail Social*, Les Presses Universitaires de France. (=1989、井伊玄太郎訳『社会分業論 上・下』講談社 学術文庫。)
- Meacham, S. (1987) *Toynbee Hall and Social Reform, 1880-1914 : The Search for Community*, Yale University Press.
- 宮坂広作 (1996a) 『英国成人教育の研究 I』明石書店。
- (1996b) 『英国成人教育の研究 II』明石書店。
- 岡田渥美・中村 清 (1969) 「R. H. トーニーの『成人教育』思想」大阪大学文学部教育学科『待兼山論叢』3、87-113。
- 岡田藤太郎 (1995) 『社会福祉学一般理論の系譜——英国のモデルに学ぶ』相川書房。
- Pinker, R. (1994) 「R. H. トーニーの経歴」R. H. Tawney. (1967) *Equality : With an Introduction by Richard M. Titmuss*, George Allen and Unwin. (=1994、岡田藤太郎・木下健司訳『平等論』相川書房、314-25。)
- Reisman, D. (1982) *State and Welfare : Tawney, Galbraith and Adam Smith*, Macmillan.
- 関 嘉彦 (1969) 『イギリス労働党史』社会思想社。
- Stephen, R. ed. (2003) *A Ministry of Enthusiasm : Centenary Essays on the Workers' Educational Association*, Pluto Press.
- Tawney, R. H. (1912) *The Agrarian Problem in the 16th Century*, Longman.
- . (1921) *The Acquisitive Society*, G. Bell and Sons.
- . (1922) *Secondary Education for All : A Policy for Labour*, General Books. (=1971、成田克矢訳『すべての者に中等教育を』明治図書。)
- . (1950) *Religion and the Rise of Capitalism : A Historical Study*, Peter Smith Pub Inc. (=1956・1959、出口勇三・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆 上・下—歴史的研究』岩波文庫。)

- . (1964a) *The Radical Tradition : Twelve Essays on Politics, Education and Literature*, George Allen and Unwin.
- . (1964b) *Equality : With an Introduction by Richard M. Titmuss*, George Allen and Unwin.
- Terrill, R. (1973) *R. H. Tawney and His Time : Socialism and Fellowship*, Harvard University Press.
- Winter, J. M. and D. M. Joslin (1972) *R. H. Tawney's Commonplace Book*, Cambridge University Press.
- Workers' Educational Association (1909) 'Oxford and Working-class Education : Being the Report of a Joint Committee of University and Working-class Representatives on the Relation of the University to the Higher Education of Workpeople, second edition, revised', Oxford. (=2006、安原義仁訳「オックスフォード大学と労働者階級の教育——労働者の高等教育と大学との関係に関する大学ならびに労働者階級代表合同委員会報告書」広島大学高等教育開発センター。)
- Wright, A. (1987) *R. H. Tawney*, Manchester University Press.
- 矢口悦子 (1998) 『イギリス成人教育の思想と制度——背景としてのリベラリズムと責任団体制度』新曜社。

香川 重遠 (かがわ・しげと)

1976年、佐賀県生まれ。NPO 法人全日本大学開放推進機構研究員。福祉社会学・大学開放論専攻。主要論文；「戦間期イギリスの失業問題における公私の協働——職業クラブ運動における労働省と NCSS との関係性を中心に」『社会福祉学』第45号3巻、2005年、3-11；「イギリス国民健康保険における認可組合制度の再考」『社会政策研究』第8号、233-51、2008年「R. ピンカーの市民権論——T. H. マーシャルの継承と発展」『福祉社会学研究』第7号、2010年、99-117。NPO 法人全日本大学開放推進機構会員、福祉社会学会会員、日本イギリス理想主義学会会員、生涯学習・社会教育研究促進機構会員。